



故きを温ねて、新しきを知る
〜帯広葵学園のあしあと85〜

子どもが生き生きするためには

―それは、大人の仕事―

学校法人帯広葵学園 理事長 上野敏郎



この12月12日、帯広葵学園に帰属する「とかちサッカー療育研究会」を立ちあげました。代表はあおいキッズサッカークラブの佐藤雅浩コーチですが、社会医療法人北斗に勤務する作業療法士、理学療法士の方三人、中学生でつくる女子サッカーチームのコーチ一人、そして丸山芳孝あおい子ども発達相談センター長の六人でスタートします。また、実践アドバイザーとして十勝を代表するフットサルチーム「ソルプレーサー」の協力をいただきます。

今後は、この中に言語聴覚士や社会福祉士の方々にも参加していただき、サッカーをツールにして発達が気になる子どもたちから療育のあり方を学ぶ専門家集団にしていきたいと考えています。

さて、私たちは「療育」という言葉を当たり前に使っていますが、この概念は1942年に日本に初めて肢体不自由児の療育施設を立ち上げた高木憲次先生によってつくられたと言われています。その説明は「療育とは、現代の科学を総動員して不自由な肢体をできるだけ有効に活用させ、以て自活の途の立つように育成すること」です。この意味を反復しながら、子ども達の未来を開きたいと思うのです。

